

「Colonoscopic Interpretation」

群馬県立がんセンター 長廻 紘 著

筑波大学教授・臨床医学系

板 井 悠 二

畏友長廻紘君が「Colonoscopic Interpretation」という著書を出版した。単著である。和文ではかなり多作の彼も「Differential Diagnosis of Colorectal Diseases」以来2冊目の英文本である（なお、編集本としては9月新刊のAtlasがある）。前回はcolonofiberscopyが臨床に定着し、開発以来12年ほどの成果をまとめ世に問うた書であったが、今回は16年を経てvideo-endoscopeによる大腸内視鏡の集大成である。

主に表面を観察する内視鏡も、生体の内部構造を知る画像医学もよってたつては形態であり、良好な画像が得られて、初めてより確かな診断が得られる。

新しい手法の画像は今までにない何かを示しており、単に何かが良く見えるだけでなく、その奥にある何物かを示唆しうる。すなわち著者が序文に引いているEinsteinの言葉“Imagination is more important than knowledge”のimaginationを与えてくれる。しかし、月を見て兔の餅つきを連想してもこれはscienceにはならない。それまでの知識をほどよくsurveyし、さらに自分のobservationに基づき未知のものをimagineし、その可能性を何らかの手法で証明して初めて内視鏡も画

像医学も medical science になる。

video-endoscopeは優れた高空間分解能を達成し、肉眼病理から実体顕微鏡のレベルに精度を近づける。正常では血管が常に見えるならば、それが見難いことは病変の存在を意味する。正常では一定の血管やpitのpatternを認めるなら、これと異なるものは異常であり、正常・異常の判定、疾患の鑑別もできるかもしれない。

きれいに細部の見える精細な内視鏡像は様々な情報をもたらし、単に異常を見つけ出し、組織を得る手段ではなく、画像所見を分析し、統計的蓄積も加え、interpretできるものになる。

このinterpretationを合理的に行うにはいかなる点に着目すれば良いかが本書に体系だって記されている。Introductionにcolonoscopyの一般的事項が手短かに書かれ、次いでtumor, inflammatory bowel diseases and othersで構成される。それぞれ初めに腫瘍、炎症の内視鏡より見た鑑別の要点が記され、各論に連なる。観察の要点、重視すべき所見、腫瘍形態の発生が小気味良く記され、また各疾患の臨床病理、所見の定義が各論で簡潔に記述されている。

本邦のcolonoscopistの果たした最大の成果はfibercolonoscopyの実用化であり、平坦型腫瘍の診断・臨床病理と思う。各章の終わりにはかなりの数の文献が引かれている。flat neoplasmの章のみ日本人のものが過半を占めるが、この項ですら英文論文はその半分以上を越えるのみである。わが国の消化器診断のレベルは極めて高いが、胃癌、肝癌は頻度が異なり小病変、早期癌を論じても欧米とはかみ合わせぬ処が少なくない。

大腸ポリープ癌もm癌を癌とみなすかみなさぬか、欧米との議論が尽きずflat neoplasmも同じ問題を抱える。本書のごときバランスの良い書が少しでも多く世界で読まれ、理解が深まることを期待したい。

美麗な内視鏡像に必要な最小限の病理像と要領の良い内視鏡所見、臨床病理の記述を持つ本書は大腸にかかわるすべての人に、そのレベルと関心に応じ与える物の多い書である。院長職と内視鏡医の二足のわらじをはく著者の努力を多とし、広く内外で読まれることを切望する。

● B5 頁320 図22 カラー写真
496 表66 1998 定価(本体
25,000円+税) 7400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)